

# ロンボークラブ

# 8



T・M良薬センター ニューズレター

ミャンマー / ベトナム / スリランカ



ニューズレター第8号  
平成17年12月11日  
T・M良薬センター事務局  
Tel・Fax : 027-254-2325  
E-mail : office@tmrc.jp  
http://www.tmrc.jp



TMRC

# エキストラ

エキストラ

**カンボジア** 2004年6月に行われた第1回カンボジア現地調査に引き続き、当会員の作田光照氏が2005年6月6日から11日までの日程で第2回の同国現地調査を実施しました。首都プノンペン シェムリアップ アンコールトム アンコールワットと、現地の人々と親睦を深めながら回りました。また、宗教省高官と会話し意見交換をしました。

同国は1945年日本の敗戦後も間接的にフランスに統治され、民衆の独立に向けた気運が高まり、53年にはシヌアーク主導の下カンボジア王国が成立します。しかし平和も一時的なもので、その後冷戦に入り、隣国のベトナム戦争に巻き込まれます。70年代に入ると親米右派により繰り返されるクーデターや内戦の末政権は崩壊、台頭してきたのがポル・ポト率いるクメールルージュでした。政権を握ったポル・ポトは「原始共産主義」を目指し、医者や大学教授、仏教僧さえあらゆる知識人を虐殺し、外国語が話せる者や、政府に反対意見をする者は次々と消され、犠牲者は300万人にのぼると言われています。その後も隣国との戦争や、激しい内戦が続き、不幸の歴史のなか国土は荒廃し、国は崩壊しました。やがて、1991年当事国間でパリ和平協定が結ばれ、93年には国連監理の下で民主的総選挙が行われ、北京に亡命していたシアヌークを国王として、立憲君主制、民主主義、自由主義経済を掲げるカンボジア王国が成立したのです。しかし、悲劇の歴史のなかで失われた国の礎を取り戻すのは容易ではなく、インフラの整備や教育システム構築、また、現在でも国土のいたるところに地雷が埋められています。

当会では2005年9月、国内で収集した衣料品をカンボジアへ送りました。今後も放置自転車を送るなど支援活動を続けて行くつもりです。



特定非営利活動法人T・M良薬センター事務局



〒371-0852  
群馬県前橋市総社町総社1024  
(Tel&Fax) 027-254-2325  
(E-mail) office@tmrc.jp  
(HP) www.tmrc.jp

表紙写真: ミャンマー、タエンデ村の学校

## ミャンマープロジェクト

### マイトリースクール開校式

が隔離されている地域を視察し、その地域内での生活を強いられている



開校式に集まる親子（ザガイン）

マーマー事務所長と開校式に参列し、炎天下のもとザガインの人々と喜びを共有し、この地に差別が根絶することを切に願った。

再建前の学校で先生をしていた同地区のメイライ氏はこの度、文部省の認定を受け、同国初のザガイン出身公務員としてマイトリースクールで教鞭をとることになった。

### ザガインマイトリースクール



200人収容、6教室、図書館や事務室も付属された学校はミャンマーでは高校レベルの設備だそうです。地域外からも多くの子供達が入学するようになると、現地業者と地域の人々が協力して立派な学校になりました。

### 整体 第一期生卒業

北部マングレーで整体診療所を開設し予防医学的治療を行うと共に、同地区日本語学校で生徒らに整体の講義を行い、職業訓練を展開する事業で、2005年6月からマングレーに駐在している当会の小川光星整体師は住居である同学校付近の賃貸住宅に整体治療用のベッドを設置し、毎日診療所を開いている傍ら同学校で整体教室を開いている。小川駐在員からの便り



11月27日に整体教室の生徒48名を卒業させる目途が立ちました

120名の生徒が半数以下になりました。引き続き整体の教室は開催してゆきます。

今こちらではヤンゴンとマングレーの中間にあるピムナーという街に政府機関の大部分が移転する予定です。

こちらの気温が下がり朝晩は肌寒いくらいになってきました

ただガソリン1ガロン180チャットが1500チャットになり飛行機代も75ドルが200ドルになりました。色々な物が値上がりしております。

### 井戸 寄贈式



井戸寄贈式で村人と

寄贈された井戸は地下 1m のモーター使用で立派なもの。「完成直後から村の人々が活用していて、テープカットする前から辺りに水溜りができていた。今後はミネラルウォーターとして販売し、現地の人々が収入を得る予定だ。」とミャンマー事業担当の田代経量当会副理事長は語る。

## ベトナムプロジェクト

### VNBC グランドオープン



式典に続々と集まる参列者

2004年夏、日本で募った寄付により仏跡寺（ハノイ近郊バクニン省）の敷地内で建設が開始されたベトナム日本文化交流センター（VNBC）の完成に伴い05年9月11日、多くの参列者で賑わうなか盛大にオープニングセレモニーが行われた。日本では同式典に合わせ参加者を公募し、友好訪問団（小林哲郎団長）を結成、9月8日から13日の日程で、越国を訪問した。

ツアー企画・実施  
旅行会社「(株)大陸旅遊」

3日間開催された式典の主要最終日に招待された日本訪問団全16名は、11日朝8時に佛蹟寺に到着した。正面の観音院と左右客殿に囲まれた中央広場に並べられたイスは400席、その天井には数枚の青いビニールシートで日よけがされている。赤いレンガ造りの中に、7mほどの純白の観音立像が南国の草花と共に美しく映えて華やかな雰囲気だ。

案内された控え室はVNBCの事務所で、20畳ほどの広間とキッチン洗面所が完備されている。後方にはコンピューターが5台設置してあり、村の若者を対象にコンピューター教室が開かれている。

ベトナム民族舞踊の余興が始まり、会場の席は全て参拝客で埋まった。一行を含む来賓が入場し、最前列には越国仏教会関係者と共に日本側支援者代表として、田澤玄泰現代宗教研究所所長、訪問団長、小野理事長が並んだ。特大クラッカーの華が散る中開式が告げられ、ティエンティエン佛蹟寺住職がスピーチをした。続いて越国仏教会代表の祝辞があり、田澤同所長が日本仏教界を代表して祝辞を述べ、「ベトナム戦争終結30周年を迎え、仏教の非戦思想による世界平和のために越・日の交流をさらに深めたい」と挨拶をした。

その後、小野理事長が寺務棟贈呈の目録を読み上げ、関係者と共にテープカットがされ風船や鳩が放たれた。

3日間の式典で、ベトナム全土から1万人を超える信徒が参集し、文化大臣を始め、各界の要路も出席してベトナム仏教の再建を祝福しあった。

ツアーに参加した当会理事の立正大学社会福祉学部教授清水海隆氏は、「日本とベトナムの交流が仏教を通じて、両国の社会福祉の向上にまで発展し、アジア仏教諸国のモデルケースとなることを念じている」と感想を述べている。

### JLHC



トゥーイ氏とフォン氏 JLHC 事務所

2004年5月から当会ベトナム事業の一環として運営に新規参画し、学校法人としてベトナム国から認可を受けている「日本語教育人材開発センター（JLHC）（ハノイ）」では、05年6月から同校職員として日本から駐在している清水智子会員はインターネットを介して生徒を募集し、生徒が急増、週6日授業を開いている。両国の交流を目的としている同校の方針で言語や文化を学んだ生徒は友好の架け橋となるよう日々努力をしている。来年日本に留学する予定のトゥーイさん（19歳）は、日本語検定試験を受けながら、VISAが下りるのを心待ちにしている。

### 田中鉄雄さん(70)ハイフォン駐在

2005年4月、現地に進出している日本企業からの要請を受けて、新たに分校としてオープンしたJLHCハイフォン校では、同年9月から田中鉄雄会員（70歳）が新任教師として駐在を開始した。多彩多芸の北海道出身田中氏は学校教員や日本語教師を経て、北海道ハーモニカ協会、マナー文化協会、写経協会、オカリナ協会などの要職を歴任し、今回ベトナム・ハイフォンへでの日本語教師として立候補した。「これまでの経験を活かし、日本文化の美しさを十分に伝えたい。楽器も沢山持って来たので、現地の子供たちと楽しみながら、未知の環境で体力の続く限り色々学びたい。」田中氏は意気揚々と語っている。



### 脇田義成さん(23) 帰国

2005年5月からVNBC職員として建設工事に立ち会っていた脇田義成氏（大阪府）は、同年9月11日に行われた開所式を迎え、約半年間の駐在を終了した。日本友好訪問団と合流し参列した同式典では、持ち前の明るさと折り目正しい性格で、駐在中親睦を深めた多くの現地の人々と数ヶ月で習得したベトナム語で言葉と交わり、別れを惜しんだ。「毎日朝から晩まで工事関係者と作業を進めてきた。共に食事をして、昼寝もしながら、言葉の通じない自分に本当によくしてくれた。コツコツと積み上げてきたレンガがこのような立派な建物に完成し、多くの人に喜ばれ感動している。」



ベトナムと日本の友好の架け橋となった脇田氏の、真っ黒に日焼けした笑顔は健康的で輝いて見えた。

## スリランカプロジェクト

### パーナマ教育センター開校



村人と喜び合う小野理事長

式にあたり日本から小野文瑠当会理事長とダンミッサラ、スリランカ事業カウンターパートナーが参列し、希望を失った被災地に新たな息吹きが生まれたことを祝し、この施設で被災した多くの子供たちが心の傷を癒し、遅くにも成長することを祈念した。

同センター長のチャンドラテナ・マヤカ氏は「1年前の津波で多くの人々が絶望したが、この度の日本からの浄財で同センターが完成したことにより、最も心配していた子供たちに元気な笑顔がよみがえることを確信している。この感謝は言葉では言い表せない。」と謝辞を述べている。

この度完成した「Panama Education Center」では2000人以上の子供たちを対象としていて図書室やコンピューター室を併設した総合教育施設として多くの住民に愛用されるものとなった。今後は同センターに置く設備などを日本国内で寄付を募り贈呈する予定だ。



パーナマエデュケーションセンター

スマトラ沖大地震及びインド洋津波の被害によるスリランカ被災地からの支援要請を受け、2005年3月にプロジェクトチームを結成し、同国南部沿岸部被災地を視察、各地で義援金や援助物資を支援するなどの活動を続けてきた。最も被害の大きかった東海岸パーナマでは、学校を失った子供たちのために日本からの義援金で教育施設を建設することが決まり起工式を行った。

当工事では被災地の復興作業でスリランカ全土でコンクリートや木材など資源不足となり難渋を極めたが、同年11月20日開校式を執り行うに至った。

### 山奥の村に学校が完成

スリランカ中央山岳地にあるウバ州バズラ地区は、高度1500mの傾斜見渡す限りの紅茶畑が広がる美しい村だ。3000

人程度が生活しているが、山肌に作られた民家を結ぶ道は縄の如く細く蛇行し、大型バスが通れば谷に転覆してしまうような場所なので、交通事情が悪く、子供たちは2時間の通学路を上り下りを繰り返し延々と通わなければならない。また、そのような状況なので学校に通わず家の仕事を手伝っている子供も多々いる。

当会事業パートナーのダンミッサラ氏は2000年から寄付を募って、少しずつこの地に学校を建設する事業を進めてきた。

2003年3月に実施されたスリランカ復興支援活動の一環で同州バズラ地区の現地調査を実施し、村の子供たちへの一定した学校教育普及のために、本学校建設事業をバックアップすることが決定し日本国内で寄付を募った。

同年8月、40万円(計70万円)を寄贈、この度、ビハーラゴタプレーナ寺内に幼稚園から短大まで学べるスリーダンマナーンダ・スクールが設立された。



村人の悲願・山肌に完成した学校



11月20日大勢の村人が参列するなか、同学校2階の講堂で開校式が行われた。式では設立者のダンミッサラ氏が、「皆の願いが海を越えて世界からの支援を受け、この秘境の地に素晴らしい学校が完成した。子供たちはいつまでも感謝の気持ちを忘れず、一生懸命勉強し、よく遊び、大きく羽ばたいてほしい。」と希望述べた。

### アジア豆知識

仏教国スリランカでは寺院が学校を運営することが認められている。寺院が学校設立の申請をした場合、政府から教師が派遣され、教材なども普及されるので、校舎さえあれば永く学校として機能するのだ。